



誹諧寂禁

地

文
138
二

~ 5
708
2



利門
號 708
卷 2

能譜寂琴卷之中

白雄坊選著



昭の事

東京市立區六久保
餘下町百拾貳番地
坪内雄拙堂增補

明治三十六年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

猶も字眼をさくらめそのち競向を
半しんへり字眼を礎のみく十日式
さきし向意しお入しきい上下の
端ありし

續さうの
八九箇やうの序の抑の南 翁

まゝの鳥の圃あるまゝ 沽圃

八八

中一

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

あはれ草子

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

あはれ草子

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

あはれ草子

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

あはれ草子

あはれ草子 ねねのよかきしほひくる
あはれもあはれしほひくる

指の樹の落はくも 且 旦 藁

是は前年の根とけりかかゝりて
けりてり入るを礎と云く古式あり
まらあをせしとみ井の根をささく
ささく上下の端ありてまをさす
根をささくてまをさす

ひらくらの名もゆきしてまのま 珍 碩

うきうきしてまのまのま 公 翁

こゝとまふ紫留の根と根を礎を文章
あつてりてまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのま

好むぬき

お月や静のぼりてあひまを 荷 兮

まのまのまのまのまのまのまのまのま

是もまふ紫留の根と根を礎を文章
まのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのま

深川をさかす

うきうきもまのまのまのまのまのまのま 越 人

新編 萬葉集

卷之七

用をすらん木奥掘く 嵐雪
西風よ十寸穂の小貝拾を来て 泥土

ひそすに車と院魁のかたみそ 野水

是めては田こまをのり留めとたのむと
めを留を揚り哉いあまは後と
もを留めゆ人こ

新編 志きねんきる月針糸 野水

馬射のそまきりま牧の野よ 公卿

こまこあ留たりし留のそと下ふの
よまかへさるるまうはくあま
まきり

月のそふまきりしね新編

牧のまきりし時のそまきり

かきつるまきり
まきりまのそまきりまきり
まきりまのそまきりまきり
まきりまのそまきりまきり

河津花 公卿

あまのそまきりまのそまきりまきり 曾良

公卿 曾良

綿籠

許六

綿籠たう〜ぬまむきの里
許六
鶴鶴階の端をつ〜いま〜
翁

すさ〜さ〜さ〜さ〜
嵐蘭

月の色水もの〜さ〜小軒素
六

築地の〜の〜典葉の駕
堂

相國寺あ〜人の〜の〜ら〜り〜
蘭

櫛の蓋〜る〜落〜竹の子
翁

かくはるの内難のるぬき〜めて〜さ〜
む好む〜さ〜あ〜さ〜一巻のり〜
あ〜して〜百〜さ〜は〜は〜は〜は〜

〜
〜
〜

何〜さ〜え〜る〜ぬ〜さ〜の〜也
野水

花〜さ〜ち〜る〜此〜酒〜念〜う〜さ〜も〜さ〜
翁

又

厚〜ゆ〜〜さ〜や〜白〜子〜さ〜ん
翁

千〜初〜さ〜む〜む〜の〜さ〜う〜の〜一〜鹿
珍碩

か〜の〜さ〜〜さ〜の〜定〜さ〜の〜さ〜る〜秋〜
〜さ〜〜さ〜の〜時〜は〜さ〜る〜も〜さ〜ん〜
〜さ〜〜さ〜の〜さ〜の〜所〜〜さ〜〜
〜さ〜の〜さ〜〜さ〜〜
〜さ〜〜さ〜の〜さ〜〜さ〜

〜

〜

新古今和歌集

卷之十一

たつるゆへにそる体そらけりつらぬの
あふも跡らうたりり 際まきまたり
とも昔秋は勿論を 雪まも跡らう
さうこそさうの心を得てさう
数へ 彼岸 岸へ
なうのきうい春秋二季のり
その指めさうりい

補又

あつこい号
夕ちのさたはあなる雷のまき 楚竹
もあつこいぬ山澤のまき 東睡
小男唐のそまきを 社射つまき 公翁

花あふふほくあえたる月 越人

こしよからきてあつこい月 荷子

又

新古今和歌集
雪降るぬねをのれと肥さるり 如柳

秋踏まけぬ猪のけさる 公翁

他季うつろいあつこい秋まよふまきも跡
あつこいさう二のるみさうさうさう
さうさう

二句一息の事

中

秋の日の

秋の日の

秋蟬のこゝろ小声きくまのこゝろ

野水

露乃実けく小糸あつちり

重五

又

又

むさおりの帛きくわく世の中小

冬文

雪二折も彦ふふ尾

越人

又

又

顔雪し旅入るまの冬信と何と

去来

とやけさうらぬまむもみ水引

嵐雪

又

後加川系伝

こゝろも湯さもきくあるはるふ

翁

寂を石の下そくふ

等窮

二る一意をあるよりのうてあること
うく競向をきくうはをちうく誰へ
さねくても誰かあり

補又

又

牛をちほつく唄を説く小

調和

山境もさきよふやぬを町

又

後加川系伝

中

秋の和名よかくは 順 旦蒙

まきの日

又

嘆けの葉もよみき白き

越人

秋の和名よかくは 順

旦蒙

秋の和名よかくは 順 旦蒙
秋の和名よかくは 順 旦蒙
秋の和名よかくは 順 旦蒙
秋の和名よかくは 順 旦蒙
秋の和名よかくは 順 旦蒙
秋の和名よかくは 順 旦蒙
秋の和名よかくは 順 旦蒙
秋の和名よかくは 順 旦蒙
秋の和名よかくは 順 旦蒙
秋の和名よかくは 順 旦蒙

補又

冷川集

類あて紙をうらちまめ

曲翠

悪七と景清と 秋 酒堂

名所と名所を所事

冷川集

涼草ハ女とつみ下屬

酒堂

伏見の意を八相あそく 曲翠

こき涼草ハ女とつみ下屬

宇陀法河

世とまいたの影の飛延山

許六

屋舎の温白水をいふえみよ 夢由

あまの旅舟のさゆあして所とくちへ

冷川集

古

古

この名をうける名所地名はふくし
所らうしなま

涼川集

初をり 伊勢のあまひのし初と 公翁

くぬきと名をく官川乃上 山嵐

是作勢とらうしなまの地名を跡とく

補

賣り集

以てし 不便や姨捨の月 翁

散る花は垣根を穿つ嵐岩 山嵐

この川田の名所は川田の地名を跡

串とくしけりよもせひありとる
こーよとくしけりよもせひありとる
を跡とくしけりよもせひありとる

志事し 記所の事

の解石

敵よたかきしむしおの事

千里

畠明ふしあまらち鳥帽よ志事

翁

又

涼川集

山依を切てかきさる関の前

翁

鏡とくしけりよもせひありとる

酒当

山依を切てかきさる関の前

翁

酒当

又

須磨寺の汗の情を流く草

重五

みのりく涙笛を吹くく

荷兮

又

下りきま指てがらぬ捨らじ

仇兆

みりい切こゝふおねひんよ

史邦

又

ゆるも長安とこと名刺の地

公羽

匡のふたところを同らるる

越人

こころよ一巻のりやうちうりよとちよへ

大勢の中の人をささむる法

ひんこ

入るるは流の浦湯の夕又るる

曲翠

中しよせんの真よ山依

翁

又

こころいよは連あひのふ人ふ

其角

そよふ風やら水の編笠

即

こころのふゆふゆふゆふゆふ

こころのふゆふゆふゆふゆふ

こころのふゆふゆふゆふゆふ

中

中

こころを月の本

松風よまらぬあまの酒の碎

羽笠

夢のうたをよみたる月

執筆

又

春の曉の風よ吹きよれ

野坡

馬場の雪の降よむ月

嵐雪

是はあまの月を古風こそあれ月は秋の月をよみたる月とつらさをかたのこころに
あまの月をよみたる月とつらさをかたのこころに
あまの月をよみたる月とつらさをかたのこころに

出たあまの月 橋をゆく月あはれ
洞の月のあまの縁をたもとてあまの月
縁をゆく月とつらさをかたのこころに

又

あまの月をよみたる月 園風

あまの月をよみたる月 猿

あまの月をよみたる月 猿

補 他のあまの月をよみたる月 猿

中

中

白解百首

稻は戸板木のちり花のらりいせ

奉白

秋葉みみそ花を所るり月よきを借ひて
陽る花又と一葉の露よりのそ他も
重みのみ葉を所るこ他の花のそよと
夏秋あきの内よきと花のそよと
陽るあしと又露の花といふもあると山
まけしと元福のそよよとあしと
あしよりのそよと古物のそよと代わて
たよと

ほろのほろ

花火もゆるも水の仇もせ 一禮

花を顔の秋の花を公なるか

花田のそよ

花のらりいせ 荷分

花を顔の秋の花を公なるか
花のらりいせ

花尾集

花を顔の秋の花を公なるか

花を顔の秋の花を公なるか
花のらりいせ

花尾集

花を顔の秋の花を公なるか

花を顔の秋の花を公なるか

花尾集

花を顔の秋の花を公なるか

花を顔の秋の花を公なるか

花尾集

花尾集

踏中よみ流るのちの朝月夜 岱水

ふらふら 旅衣 笠下は流るをうら拂ひ 羽笠

是れをわといふとて流るは滞語を用ひたり是等もふらふらといふ

ふらふら 系 撮腹一とつりゆさふきと 去来

の解らぬ こゝろふむよりおの撮 吉野山 仙化

世二白の流るといふへと流るはあらうと附きりくむるふさうと撮をさうといふまゆれとも先と下とて流るはちとて自ぬの人といふと流るはたと附とて思ふ

ふらふら 他のもとの花流るの花さく古人も多し世さうこゝろはくさうなり

補 あまを向の事

あまを 花の流る後さうもうら山 越人

田あまを吟を贈るに 公翁

又

松田とよみ 常盤山を登るゆら花流る 桐葉

平庭よりゆら流る連歌師の松 叩端

是れ文を流るの揚るゆらあまをいふとて

一美の... 宿の巻... 羽... 荷... 調和

山中の巻

見ほき... 月... 羽... 荷

山の中... 宿の巻... 羽... 荷

山中の巻

持持... 翁

醉狂人... 執筆

この北枝曾良祖翁と山井の温... 燕い... の吟の... なる

活茶の技

古うちも... 野童

鬼貫亭... 瓢界

この鬼貫亭の... なる

ひん

廟中... 調和

山井の温

燕い

調出る母の聲の生ふ日 調和

こころの調出る母の聲の生ふ日 調和のあり
るにあり

海竹集

晴るのふ咽かえさるる花さか至 乙品

あふらふるる八重揺る水 沾圃

こころの生る哉尚あそびを時にかかひを
るにありありをの跡くふと
連歌あそびは花をの跡くふと
むしとららけ跡くふと
跡くふとあそびとてゆきとららけ
跡くふとあそびとてゆきとららけ
跡くふとあそびとてゆきとららけ

あるの正花あつさるあはれはゆきとららけ
跡くふとあそびとてゆきとららけ
きききき

戀句の夏

あつさるあはれはゆきとららけ 荷分

縁さるるあはれはゆきとららけ 翁

又

大膽ふたりのひらりをぬきとららけ 半残

紙を濡紙のこころをぬきとららけ 土芳

こころの

中

古人の名よあるへうまかむ拙きるは
きりぬももひくくともへへ

早し女の唇をぬあるく後釋

口よりささくぬ人の生ら申

是の東都めて蒼流と唱ふるその
集中よあり意のなり出んとてら
さるぬとるとあるなるるゆたう
親子兄弟君臣の間めそそわのぬ
とらああり且風流といつとを修り
もたう

赤川集

掛乞よ意のさるるをのこせさ 公羽

かくいそんよき意の情も風流もあり

かくいそんよき意の情も風流もあり
かきこたうもおのりうううう
らうへうくも氷清玉流といふ
意のなりあさきさゆ源切よもり
む意のなりよかきうううのうの風
流二るのうの風情をのりさうと

行水の時面目をけしぬいと

その等うし顔ハ顔もはる知

こまらうのりや中事お美流尾流也
流のせしるこいりあやのなり二るの
向なり當時美流尾流はけるの体な
りよのひらきよかきううう其基士朗
出く元禄のむりしは後でいゆこ
蒼流の思ふたのといふ

赤川集

公羽

百姓寺人物母の教

まゝりゆる作やけく世の百姓も作
寺もついでに中しこころいふあ
福とえ福の徳風をうら

ゆゑかもあるいふうの寺なれや

いふあくまの金一

うめくよおのりまゝる意をして

百姓のうらあをその少将

とて角の階くきふ人由縁一
能も階はりのまふもこをくふ
そのら作かまの上ゆめを同ある

さかふ品かつりて急をさ

うき世の果はれ小町也

と階くきさかめ一階を名人の白作安
らうふいひううて候様候と其角の
非を悔ひらぬことと白旗を候ふりこ
アめ

藤向二句のる灯屋の事

あもあまの町いさてもあれ果

ひと声もあまをる松高の葉

是年をのり候ううつてゆへに灯屋め

一ふたは目をもて町のあゆむるを
又たは目をもて町のあゆむるを

雨の音も静かにけり 六六あや也

真一ふたは目をもて町のあゆむるを

こころさしつとあやむ一藤のふさるが借
まことのゆくまゝ人の心をせむるのふさ
ゆふのさるまゝとあやむるのふさ
古人曰藤のふさるをいふこと
ふささすくふささすくして一る、風暗を
所く、

坊主の連は油で風ひく

こころさしつとあやむ

古今和歌集

院の田の青草をてしむるは 凡兆

かたのあやむるをたね社あま 公翁

白集

火ののろをいのかの山々の寺 去来

ほとけのあやむるをたね社あま 公翁

こころさしつとあやむるのふさ

藤の借路のあやむる

古今和歌集

歌の門にゆきおる妹ふたりの 曾良

かきつゆるつ母ハ野中の地花堂 露丸

妻あゑとれを山犬の色 公羽

續
三十一葉

谷かたふおの扉をたうれく 其角

互故をそらゆるひらの偷り

顔あゆく都の女の車りうしを 敏

韻
集

いさやふを急もまろへき為のれ 式水

此色をかへて出る紫物 公羽

晨明子毘沙門堂の小方丈 訖六

美の森

ひくまを死を控をせし留るり 彫棠

物中りくをほも針よかよき 横八

ありゆもすくおふ鱗のまきここの 公羽

其
代

雲の外鏡をるるる松をて 露沾

履子とさるるるる系のを終 沾荷

八月を為粒むる武者一人 公羽

八
月
武
者
一
人

山崎

山崎

山崎

壬の日

身みをこして一まの由をほと世角

似に煉れん乳にゅうをかくを山やま桂

雪ゆき拂はらひ鏡よ人影かげの山雨あめ桐

源川集

都みやこをの去さるの行ゆき跡あとよ思ひぬれる利り合

心こころ見みしり満みちく釋しやく迦か堂だうの暮酒しゆ堂

笑わらひを思おもひ入候こうゆうにはまり幸さい福

いふ

氣き身みと習男おとこの世をあんさん支考

清きよ居いの里をりしてあまりく大だい草

吟ぎんちんの公あまりの世よの出入でい翁

いふ

世よをよめる人ひとをよめる源げん山さん寺てい其その角

乳にゅう人にん用よう意いの世をよめる我われ峯

志しをよめる其その世よの世をよめる倫りんの世をよめる嵐あ雪

いふ

深ふかかくをよめる周しう札さつの世をよめる其その角

山崎

山崎

山崎

こしとせり

米茹ゆくつと吹く花も今

助叟

葦靴のしらのぬる如月

園女

まのふの草履つゝいよ飛越て

山人

あきの日

秋の夕旅の法連歌いにかゝる

翁

るるかへ晴て富士えゆる寺

荷分

寂とそ栞のそけのふるる音

杜國

あけのつゆ

朝よりの曇てゆく露の息

其角

鈴繩ふ鮭のさそいひゆく水

孤屋

一層のやまゝな枝あうあ

其角

のしき

垣穂のけしきを流るる水

公箱

あやめくさな妹ら夕なりを

越人

あのをそくくゆる涙はむせ

翁

あけのつゆ

赤穂の堂ふ思ひうち海

枳風

待宵の清らき雲のうらみの中
翁
友りの鏡のうらみの色
山化

清雲の生るる雲のうらみの色
曾良

小袖をるるをまじり戒の師
不玉

くろくたの母よ似るる由か
翁

續
祥寺ふ一日あまふ砂のうら
里圃

槻の角のうらむ貴穴
馬寛

濱山の牛よ徳をえりよ也
翁

あはれ仙
人ひきかきさきさきのうら
曾良

松拍をく風のゆきとたりの
石雲

ま紙射さきさき新猪の尿
公羽

相見山考仙
圓珠をよまらぬの二日月
露丸

つら歌よちまかるとなるおまのむ
重行

紙をよ小懐とけき
翁

中
三

山崎の巻

中三

ひまこ
はるの巻のまゝかたはるふる夕るる

珍碩

親ふたうくひて月よりのう

東林

秋めは宮ものそくせふあひりの

路通

あまの巻

播衣をるめを環の糸より

松洞

うらまゝる女は別て日をけりま

奇香

矢角らよ腕のとるる意雅

翁

くんの巻

あはれは海嶺の袴をまよさげ

猿垂

雪の巻の中をなほはよしとく

雪芝

志あせせし矢橋の船ふらふはり

公羽

宇陀法師

けちるるを籠月への南

李由

た邊の持持可きよ舟便

許六

朝く喚くよの木魚さし

汶村

あまの巻

里人ふ藤の紙ほくこと秋のる

越人

月なりお波よ重石おく橋

羽立

山崎の巻

中三

こころひきくる木の根よ花の軒とえ 野水

類寒

くらき白田も花の末かきおそ 岱水

はくもつとふ鶯の卵より 翁休

まつゆき隠者の宿きかんしを 許六

きき

絡より紙摺乃柱より筋より 翁

こころいふをむかかんはし 露沾

志るるなを記念の鼓音もなき 沾荷

云のり

懐ひきくせふよきの温泉の山 翁

のこもくも筑紫の袂伊勢の帯 越人

内侍の撰む代々の扇の圖 荷兮

あし

本堂い中とあき磐のほしら建 正秀

四階後の袂をまきり給ひぬ 珍碩

歯をいふ人の姿を給ふあそ 正秀

正秀
珍碩
越人
翁

たはし

町をみくろく行敷のま

釣雪

盗人ふはきそふ妹を此を流す

翁

新玉のけきぬ園くの針

曾良

あつせ

木狭まふりしおし松の枝

長虹

秤にかゝれ人々の奥

故及

世年よりたるとて奈々の流のま

一井

と旅百夜

後任女きぬこうちく

其角

山ありと乳を呑む猿の声出

工齋

命を甲斐の標ともえよ

枳風

美つ

下りたむしうぞうのほ解

其角

よきそのやぬ江の海をえおして

溪石

さるやうの中侍は木多の麻衣

琴風

旅寒

るるこぬきて世はまをくらふ

李由

いさを母の唄の食屋又そむむ

木導

旅のついで

中

三

早更あらしむ花折の風 朱迪

又虫をゆふいよ歌しそら秋 翁

をふるよあらしの風を神おとし 去来

ゆくゆくは蓋のひそぬ半柱 元北

急かしのそと郷の鐘しりきり 杜國

くみまの納をたをたしり 野水

麻耶の高橋よはりのかきさる 野水

夕冬ふかゆふの冷風草をる 元北

軽の口まよをかきて幸味より 翁

的場のまき勝よ咲れ山吹 釣電

春を海へそらの年入力石 公翁

汲ていそりく酔る井の水 露丸

早更あらしむ花折の風 朱迪

月夜を礎の楹のはえうや

嵐雪

くも風もく霖はあはれ

虚火

傾城のさびしうる歌あそび也

其角

渡舟のすこ

起雲ちうしねき

史邦

陣もこのうて車引さむ

凡兆

うた人を招穀垣よりうらせ

翁

今婦の君の来らんとき

重五

重五

松手侍津浪のあよらんぬ

荷兮

佛うらまゆる鬼あそびなり

翁

補

染表はるるおまへ

工山

笠あて夜の破を綴りみれ

桐葉

秋の鳥の人喰をゆく

翁

巳う光

安しと矢例のゆきと歩後

翁

多かたのねりものこころ

半残

松手侍津浪

佛

染表

高田の巻

子梳子男ゆりくつらんと組 土芳

高田の巻

鳥の巢とてくはあらしと尾 公羽

二月もはかり甲ゆもきとて 葉夕

あしよ光るふ方のゆき 曾良

高田の巻

名ふのふくふ山々の岩依 翅輪

橋衣ふもくく尼まのふ 曾良

この月もあふふかきくき 翠桃

高田の巻

高田の巻集てもむく色 其角

自まそふ園のゆあぬねてあし 嵐雪

きく ながき風の石葛まら 翁

高田の巻

空を待らるるよせつらるる秋 杉風

末彦を釘ふかきくるゆきのあ 満子

磨らうらたをゆくの行器の吟摘 涼葉

高田の巻

高田

高田

山中の巻

あゝと降ちたる山の菅の寺

北枝

菫女にも人回舎わさし

曾良

さぬちの心よ お君の名もあつて

翁

あつこころ山

鶯の尾を松葉の園に掛られ

叩端

風を身をさそくきふそ付死

桐葉

華とやそ木の庭を歩たれぬ

叩端

別を考

山のかつちる下市の里

子珊

その外のほろろ蟻の気むらじ

杉風

西日乃月もすこあふ影

桃隣

信長の持り

何のころもあふれる縄の巻

瓢界

おそ路一やいけの年のあ覚え

立志

あつちの心よ お君の名もあつて

野童

あつちの心よ

植おくをきくる田の中の小田

塔山

ほろろの心よ お君の名もあつて

路通

こころその思ひ深世一人

翁

唐田之孝伝

鳥羽玉の切女舞ふふも

叩端

あをちあは破る葦舟の月

翁

秋を程多味ふその冷ひなり

桐葉

きん葉伝

流く酒天むほりゆく

公羽

とくくと枝の風のあはれ音

野坡

稀盗人の縄とめて屋敷

公羽

佐藤系

花菊の色のをよふも現りしを

治達

あゝのす湯のぬめぬ

曾良

ふる程りる供ふ今年寝癒の痕

翁

盛島紀ゆ

たは鳥の火よおしゆく在る馬

越人

瓦庇ふおろりなる月

杉風

ふらを所ふ人を引とる

苔翠

たは鳥の火よおしゆく在る馬

書

巻六

栗の葉の巻

縹の仕出りの流り常棣
月影もささく山をの秋の長ふ
枝一本を道の程に

酒堂
詠竹
何中

とくふ山家

やもとりとくふを逢坂の折
晨月よ志を隔て馬と駕
夜終志をさうり即痛やをき

公翁
卓袋
木節

ひくらの軍記

捨ふのねよ戒律の尼

調和

羽と志ぬ年木の葉の禪の売

立志

風阿るそい日阿阿るを降

直方

小川集

あふほの人魚臭ふ也

翁

る乞ひ志を飛うる降出

大艸

紛草をささく指管の葉血

惟然

まきの巻

清簾の糸角よ志ふさうみ

大艸

歌公声く鳴してあうるをさ

路通

栗の葉の巻

書

巻七

燈の中へおろし早桶翁

こまじくを燈として俗よりくまじくはの
雑俗よあそぶあり

縣向自他の事

る硯よりむうひまをれ捲け 自

初めの花咲きそらひら夕少ふ 時節

新くふれと終く女と群 他

け外踏うとたり

むらじ火よりたれ流也かふるらむ 他

松風落く水のりさ糸 其場

さうとさうと酔のさめさる 明色 自

け外踏うとたり

並木の香のさらくと落 時節

巡礼の子紙抱き朝の月 他

館新用もはくは飛流いきま 他の向防

心よりくまじく赤のさのま 他の巡礼の
あらし

そのく表もまの各残る 自あそびの
むらじ

け外踏うとたり

け外踏うとたり

け外踏うとたり

け外踏うとたり

其場

比留くさるるのきるぬくこのきよ

有病の粥ふきしきまふ小くかき

きりりのきりりのもさむ秋あき

いふさうのき踏さな

花よりけいさきゆいて糝ゆい

志るる居るまふ人はあひり

流も先裾よむろの下の向もら

流をささひのきふきまはけし

其場

自

他自よりい

自自のき

自自のき

他

他の向い踏

他の居の

自他の居へ

いふさうのき踏さな

某よたるむ孫まはきぬ

人をもり侍田中の流垣守

ふちれ杉葉をまゆさきあき

流ろくみちる屋根葺の塵

鯨窓一二の鏡二つくさへも

まふかみかきる教よそまき

新しや我も流世ぬあのとく

いふさうのき踏さな

自

他自よりい

他少むさの

他の向い踏

他

他縁つきの

自他のあき

あはれ

あはれしきその舞の境のわらわりの 自

いのちわらわりの活きの春 自

又よしは揺るりの女房を 他

いふ

巻ころふ舟もむらふ舟来り 他

うき世の中もたのりた哉 自

西国をうき都も旅あそび 自

酔ふと自他のころち肝要なりとてころの
轉しをあらへしけふは路をさちりしと
ゆふの自他のころちみそ人情あそ

天賦

踏をたうしりつる也人情うちつる

とき 其場 を傷めあらし 時良

時分 天相 け五つとつるをさうしも踏

人怪なるなるころは あ

人情のむを人情をさるみそをさる

あし い のころの あ の あ の あ の あ の

人情ある二るは あ の あ の あ の あ の

る あ の あ の あ の あ の あ の

其場 梳ゆの舟を門の馬はた

補 さらさらのそをさる川筋

天賦

天賦

其場の
あらし
赤くすきし
ゆたのさや

補
此るふらうる
双たの石

時
日いらも
入相の鐘

補
湯水の香も
朝日ほき

時節
雨の夜門田の
輪紫積ふ出く

補
時を暮く
啼て通るる

天相
雲とく
空六向色く
風なて

補
昔天よ有
明月の
乾ほき

つをも人情なるらる

を備ふ 野山海川あをり

を備ふ あらしを 硯机戸障ふ

まてを備ふ あらしををり

時節とく 空夜旦露のてけり

天相とく 日月風多陰晴のすき

又人事あて 自とも他とも

るあり 踏るも 自とも他とも

なり 中をい

朝すく 杖持る 杖持る

うし 空あも 空あも

かく 踏る時 踏る時

ふい

中 四十一

はるるかきりるから後三川

うく跡るるたるたるも自のるふたも也
是跡るるたるたるの自地をまゝに

祖翁曰縣るるのりあ念のりるるるるるる

別之るの轉しこ

古人曰縣るるのりあるをうらうらと

是すここのるの轉しこ

鳥酔曰縣るる有用ありては用は用り
志る有用の所方をみりよへりて是を

之るの轉しこ
白雄曰卷中のりくうく味のそ惹り
縣るるのる味をそるるるるるる

俳諧寂琴卷之中終

谷北郎